

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

現代の標準日本語には、話し手が自分を表す一人称代名詞、そして相手を示す二人称代名詞が、それぞれ数個もあることが知られている。ところが実際に、ある特定の人物を限って、その人が日常生活の中で自分および相手をどのように言語で表現しているかを調査してみたところ、意外な結果が出たのである。

第一に、人称代名詞を使用する範囲が意外に限られているという事実である。それでは代わりに何を使っているかと言うと、自分および相手の、広い意味での資格や地位を表すことばが使用されていることが分かった。

A 一家の長である男性は、子供と話すときには、自分のことを「おとうさん」とか、「パパ」と言う。兄は弟妹に向かって、「お兄ちゃんのボールペンどこへやった？」などというのである。**B** 弟が姉に対して自分のことを、「ねえ、弟ちゃんにこれちょうだいよ」というようなことは言わないし、男子が母親に向かって、「息子は出掛けるとも言わない。このような場合には、「ぼく」「わたし」のような代名詞を使うのである。

相手に直接呼びかける場合にも、お父さん、お母さん、おじさん、おばさん、にいさん、ねえさんなどは用いられるが、弟、妹、息子、娘、孫、甥、姪のような言葉は、いかに変形しても使用することはできない。このような親族に対しては名前か、二人称代名詞を使うのが普通である。その反面、親や兄姉には人称代名詞を使って呼びかけることはまれである。

こうした相手および自分を示す言葉の使い方は、家の外での社会的な場合においても見ることができる。学校の先生は生徒に対して自分のことを先生と言う。生徒の方は、先生を先生と呼んで、あなたなどとは言わない。会社でも、目上を職名・地位名で呼ぶのは普通であるが、二人称代名詞は用いられないのである。

そこでこのような原則に基づいて、一人の個人が生活の中でどのくらいの異なった自己の呼び方をするものかを見てみることにする。

年齢四十歳の小学校の先生Aには妻と男の子一人、そしてまだ大学生の弟がいる。他に近い親戚としては別居している父と兄がいる。この先生が、いくつ自分の呼び方を持っているかという、少なくとも七種もあるのである。自分の子に対しては「おとうさん」、弟に対する時は「にいさん」、妻と話すときは「おれ」、父に対しては「ぼく」、兄に対しても同様である。隣の子に向かっているときは「おじさん」、学校で生徒に教える時は

- 1 -

「先生」、同僚に対しては「ぼく」、校長に対しては「私」であることが分かった。

この人は話の相手が誰で、自分に対してどのような地位、資格を持っているかを見きわめた上で、その場に最も適切な言葉選びをしている。**C** 相手の性質が、自分の自己を言語的に把握する角度に直接反映するのである。「自分は何者であるのか」ということが、「相手は誰か」に依存する構造になっていると言える。このような言語による自己把握の

I 性は少なくとも西欧諸国の言語にはまったく見られないことは特筆に値する。英、独、仏のようなヨーロッパの言語では、話者が自己を言語的に表現する角度は、原則として一定不変であって、用語としては一人称代名詞のみが用いられる。私はこの型の自己把握を

II 的な自己表現と呼んで、日本型の **III** 的自己表現と区別したのである。

さて、このような相手に依存する自己規定とは、自己が自己自身を見る視点を他者の立場に移すことを意味すると考えられる。人が自分を「おとうさん」として把握できるためには、自分の子供の視点から自分を見る必要がある。またある人が先生と自称しうるためには、生徒の立場から自己を見直さなければならないからである。

相対的な自己表現の言語習慣は、かくして必然的に相手の立場からの自己規定、他者を介しての自己同一性の確立という心理的パターンにつながっていくものと言えよう。これは自己と相手の立場の同一化と称することもできよう。自分が具体的な自分であるためには、相手が必要であり、その相手を通しての確認が要求されるからである。

このしくみが、社会学者が日本人の特性として指摘する他人志向型の大勢順応主義と無関係でないことは明らかであろう。他の人の出方が分からないうちは、自分の意志を決定できないのである。しかしまた自分を自分の立場からは決定しにくいという心理構造は、マイナスの面ばかりあるとは言えないと思う。日本人は一貫した独自の主義ハウシンをたてて、それをどこまでも貫こうとするより、具体的な状況に応じて、その時その時の最も効率のよい解決を見出すことに長じているのはこのためであって、独断専行的な硬直さがいれば目立つ西欧的な行動様式と対照をなしている。

この相手にたよる相対的な自己確認のパターンは、日本人の欧米人に対する心理的動揺をも説明することができる。私たちが人間関係における自己の座標を決定できるためには、相手が誰であって、その人が自分より上か下かといった相手の位置づけがセンセツ条件となっている。ところが外国人は、私たちがこのような位置づけを行う一切の手がかりを与えてくれない。そこで私たちは相手が決定できないために、結果として自己の位置づけも

できないという心理的に不安定な状態に置かれることになる。また私たちは見知らぬ他人に対しては、顔見知りの人に対する場合とは非常に異なった接し方をするので有名である。これも、自分が位置づけることが不可能な相手に対しては、相手を無視することによって自己の不安定化を避けようとするからに他ならない。日本人は相手の正体が不明のときは、その相手と正常な人間関係を組めないと言っても言い過ぎではないと思う。

日本人の持つ、この柔らかい、相手と同調しなければ安定しないような弱い自我の構造は次のような現象にもよく現れている。

日本人が外国人に日本語を教えているとき、相手がカタコトの日本語を使うものだから、いつの間にか引き込まれて、気がついてみるとこちらもカタコトになっていることがよくある。相手の不確実な日本語が、こちらの心理的安定を崩してしまうのである。

相手に合わせることをしない欧米人の場合は、こちらがたとえ下手な英語を使っても、彼等の英語がしどろもどろになるようなことはまずないと言つてよい。

考えてみると、日本語の語彙の中には相手および他人の気持ちを、こちらが一方的に推しはかる性質の言語や表現が多い。「サッし^dがよい、悪い」「気がきく、きかない」「思いやりがある、ない」のような表現は概してヨーロッパ語に翻訳しにくいものだが、他人が意見なり願望なりを言語で表明しないうちは相手の気持ちを推しはかるような態度に出ないことが、日本以外の文化では常道だということを知れば当然である。「IV」という複雑な感情も他人の気持ちをサッして行為を先取りすることが平素行われているからこそ成立するので、いつもメイジ的にたのまれたことだけしかやらなければ問題は生じないわけである。

(鈴木孝夫『閉ざされた言語・日本語の世界』より)

*常道……常に守るべき道

*平素……ふだん。つね日ごろ。

問一 —— 線部 a e のカタカナを漢字に改めなさい。

- 3 -

問二 A C に入る言葉として、最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同一の記号は二度以上使えません。

ア そして イ または ウ 例えば エ すると
オ つまり カ ところで キ しかし

問三 I III には、他との関係が欠かせないという意味の「相対」か、その対義語となる「絶対」という言葉が入ります。あてはめるのにふさわしいものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 相対 イ 絶対

問四 IV に入る言葉として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、さばをよむ イ、しゃくし定規 ウ、不言実行
エ、ありがためいわく オ、かわいさ余つてにくさ百倍

問五 —— 線部イ・二の「ない」のうち、他と性質が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問六 —— 線部 1 「このような原則」とは、どのような原則ですか。五十文字以内でわかりやすく説明しなさい。

問七 —— 線部 2 「自己」と相手の立場の同一化」とは、どういうことですか。二十文字以内でわかりやすく説明しなさい。

問八 日本人のような自我のあり方の長所と短所は何ですか。それぞれ二十五文字以内でわかりやすく説明しなさい。

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

マサト（小学六年生）とカズヤ（小学三年生）は兄弟。両親は用事ができ、泊まりがけで出かけることになったが、二人は留守番を希望する。

次の場面は、兄弟二人だけで過ごす夏休みの数日を追ったものである。

－ 5 －

著作権上の都合により文章の掲載を省略しました

著作権上の都合により文章の掲載を省略しました

著作権上の都合により文章の掲載を省略しました

翌日、二人はマサトが鬼やんまを捕まえにきていた硯川^{すずり}近くの雑木林にやって来た。
兄と分かれてカズヤは鯉^{こい}釣りをしているが、そこへカズヤの苦手なヘビがあらわれた
のだった。

著作権上の都合により文章の掲載を省略しました

著作権上の都合により文章の掲載を省略しました

◆ 中略 ◆

著作権上の都合により文章の掲載を省略しました

－ 9 －

著作権上の都合により文章の掲載を省略しました

問一 ― 線部1「……」と表現されていますが、なぜ、弟の言葉に返事をしなかったのですか。その理由を十五字前後で答えなさい。

問二 A、 E にあてはまる最も適切な言葉を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同一の記号は二度以上使用しません。

ア、わずか イ、まるで ウ、やはり エ、どうも オ、さらに

問三 B にあてはまる最も適切な言葉を次から選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|-----------|---------|----------|
| ア、感動と動揺 | イ、幸福と同情 | ウ、自慢と憎しみ |
| エ、尊敬とあわれみ | オ、喜びと恐怖 | |

栄

問四 — 線部2「いつから吹き出したのか」という状況表現によって、登場人物のどのような様子がよみとれますか。三十字以内で答えなさい。

問五 C、D にあてはまる最も適切な漢字一字をそれぞれ答えなさい。

問六 — 線部3「いたずらっぽく笑うマサト」とありますが、この時のマサトの気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | |
|---------------------------------|-----------------|
| ア、弟に自慢 ^{じまん} しようとする気持ち | イ、弟を困らせようとする気持ち |
| ウ、弟をからかおうとする気持ち | エ、弟に反発しようとする気持ち |
| オ、弟を見くだそうとする気持ち | |

問七 — 線部4「真つ青な空。抜けるような空があった。その空の真ん中に、鬼やんまは消え去った」とありますが、この「真つ青な空」、「鬼やんま」が象徴^{しやうきやう}するものは何ですか。それぞれ分かりやすく十五字前後で答えなさい。

問八 この場面の経験を通して、マサトとカズヤのそれぞれが手にいれたものは何ですか。本文をふまえて六十字以内で分かりやすく答えなさい。